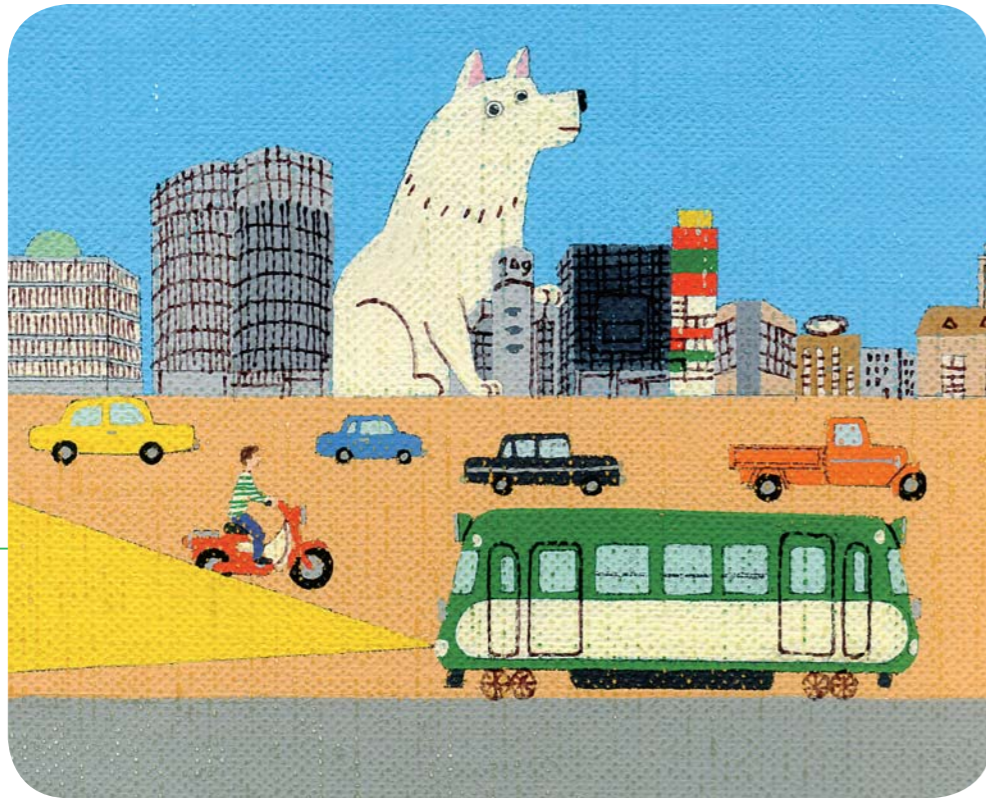


illustration by Takao Nakagawa



column | RAMPWAY 10

首都高名所案内
渋谷の
お稲荷さん
コラムニスト
泉 麻人

渋谷は若い頃から親しんだ街だ。良く行くようになった高校生の時代は、パルコが出来て公園通りの一帯が人気のスポットになり始めた頃だった。ほんのちよつと前まで普通の民家が並んでいた坂道が、あつという間にファッションビルの街並に変貌したことをよく憶えている。

いたのが道玄坂の界隈だ。あまり頻繁に通うことはなかったけれど、いまの109の裏手にちよつと面白い小路があった。年配のオヤジがやるバラック建ての古着屋が2軒ほど並んでいて、米軍払下げのジーパンや洗いうエスタンシャツが置かれている。いわゆるお宝モノを探しに立ち寄ったことがあったが、いま思えばそこが「恋文横丁」(占領下時代、米兵向けラブレター

の代筆屋があった)の最後の残片のようない画だったのだ。

の大岡昇平は渋谷の周辺を転々と移り住んだ人だが、自伝随筆の「幼年」を読むと、大正の初めに数年間生活した家はこの稲荷橋のすぐそばにあったようだ。そして、稲荷橋の名のもとである「田中稲荷」のことについても書かれている。

その小路の先、いまも健在な台湾料理「麗郷」脇の石段を上っていくと、百軒店の界隈に入る。近頃は「ひやっけんだな」と平がな書きの看板も出ているが、当時は「ひやっけん」と呼ぶ奴もけっこういたものだ。クラシック喫茶の「ライオン」やカレーライスの「ムルギー」、僕が行き始めた頃はもう潰れた後だったけれど、テアトル系の映画館が何館か存在した渋谷の奥座敷の繁華街。いまもどこことなく懐かしい雰囲気が残っている。

「境内には樹がよく繁って渋谷川に影を落していた。一名『川端稲荷』といい、本殿の右手に大きな銀杏があり、秋にはギンナンを拾うのが楽しみだった」と「幼年」に記述されるこの稲荷、現在の246ガード、つまり首都高の真下のあたりに存在したのだ。

昔ながらの店が残っていることも一つだが、ブロックの一隅にぽつんと建つお稲荷さんがいい味を醸し出している。赤提灯に千代田稲荷神社と名前が出ているように、もとは千代田江戸城内に祀られていたものなのだ。百軒店を越え、さらに奥方の神泉、円山町の方へ坂を上ったり下ったりしながら歩いていくと、渋谷らしい起伏のある地形が体感できる。

実は先日、「狂熱の季節」という60年の日活映画のシーンに田中稲荷を発見した。渋谷を根城にする不良少年役の川地民夫が東横線端の安アパートの周辺をうろつく場面で、一瞬稲荷の鳥居が映りこむ。246(六本木通りへのバイパス)の工事が始まる寸前にロケされたのだろう。

ところで、渋谷のお稲荷さんといえば、渋谷駅のすぐそばに稲荷橋という小さな橋がある。東横線の一番東側のホームに立つと、246ガードの向こうに垣間見える渋谷川の小橋だ。作家

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。「週刊TVガイド」などの編集者を経て、84年、フリーのコラムニスト。近著に「東京考現学図鑑」(編著 学研パブリッシング)がある。

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 価値創造

5 これからの企業に求められるもの
慶應義塾大学 総合政策学部 教授
同大学SFC研究所キャリアリソースラボ代表
花田光世

8 イノベーションの実践
富士ゼロックス株式会社 取締役常務執行役員
栗原 博

12 コラム バイ・ザ・ウェイ 太田治子

14 CHALLENGE
ハイウェイオアシスの可能性

15 データ物語
距離別料金に移行したら...

16 首都高HEADLINE

18 business essay
脳、危うし?
独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター
特別顧問
伊藤正男

20 つくる人まもる人
首都高ETCメンテナンス株式会社
山内伸一郎

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Minoru Saito
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited